

FOA-NEWS

通算第34号

2013/9/17

米スポーツ界のトップ審判 日本を語る

全米スポーツ審判協会ゴールド・ホイッスル賞授賞式に参加して

阿部 仁

この季節には珍しくすっきりと晴れた7月末日、ミシガン州グランド・ラピッズで行われる全米スポーツ審判協会（National Association of Sports Officials）のゴールド・ホイッスル賞授賞式会場に全米からビッグテン・カンファレンスのレフリー、ビル・レモニア氏の友人が集まっていた。

ゴールド・ホイッスル賞とは全米のスポーツ審判員の中から、日頃の審判活動を通じての貢献のみならず、社会貢献や地域貢献などを含め総合的に大きな功績を残した審判員を表彰する制度である。1988年に設立以来、NCAAフットボールの審判員としては初めての受賞者であるレモニア氏は、日頃の審判活動に加え、USAフットボール（インディアナポリス）を通じて国際的に展開している審判教育活動や東日本大震災被災者への支援活動が認められ、選考委員会の満場一致での授賞となった。

1973年に「人員不足で困っていた友人のために、バイト感覚で小学生の試合で笛を吹いたのが審判歴の始まり」と語るレモニア氏は、その輝かしいキャリアの中でオクラホマ大学対ボイジー州立大学のフィエスタ・ボウル（2007年）を始め、BCSチャンピオンシップ（2011年）、第1回ビッグテン選手権（2012年）等、数々のビッグゲームでレフリー（主審）を担当した。レモニア氏の人脈は米国内だけにとどまらず、IFAF（世界連盟）主催の世界選手権などを通じて知り合った審判員がメキシコから2名、日本から5名授賞式に駆けつけた。2007年のIFAF世界選手権川崎大会でレモニア氏と同じクルーとして来日したピリー・ベケット氏（ACCフィールド・ジャッジ）、リック・ネルソン氏（ビッグテンアンパイア）と同行し、授賞式スピーチから垣間見る全米スポーツ界トップ審判の素顔に迫った。

■日本との出会い

かつてのレモニア氏がそうだったように、日本でアメリカンフットボールが1934年に開始されたことを知る米国フットボール関係者は少ない。レモニア氏は機会あるごとに、知られざるフットボールの日本史をアピールすることに努めている。ゴールド・ホイッスル賞の授賞スピーチでは過去6年にわたる日本フットボール界と



ゴールド・ホイッスル賞授賞式で感謝の意を表するレモニア氏。家族、友人、日本におけるフットボール事情、東日本大震災の被災者支援と話は多岐に及んだ。写真左はレモニア氏のメンターで、2007年ゴールド・ホイッスル賞受賞者の元NFLレフリー、ジェリー・マークブライト氏

の交流の原点となった川崎大会について熱く語った。

「初来日は2007年でした。今から考えると失礼な話ですが、日本でアメリカンフットボールがどれだけ長い間行われているかまったく知りませんでした。当時は秋のシーズンが始まる前の、コンディションを整えるための機会としかとらえていなかったのです」。

そこでレモニア氏が出会ったのは、「勤勉で、規律正しく、コーチングの行きとどいた」日本のフットボールだった。以降、レモニア氏は毎年審判クリニックのために来日し、時には日本の審判員と一緒に笛を吹いている。なかでも2008年と2009年のグローバルチャレンジボウルでU19の日本代表がアメリカ高校オールスターチームに圧勝した一戦は今でも彼の印象に残っている。「2007年の私がそうだったように、宿題もせずに日本に行くアメリカのチームは、間違いなく痛い目に会うことでしょう。実際にそういった状況を何度も見てきましたから」



ゴールド・ホイッスル賞授賞式にはレモニア氏にお世話になっている審判関係者が一堂に介した。写真左から著者、レモニア氏、関東審判部の川田丈浩氏、七久保裕哲氏

■被災者支援活動から受け取ったもの

「2011年3月、私が日本で審判クリニックを終えて米国に戻った矢先に、地震と津波が日本を襲いました。4月にここミシガン州で開催した春のクリニックで、自分が作成した審判トレーニング用のDVD売上を被災された方に直接届けたいと思い、クリニックに参加していた日本の審判を通じて釜石市にある二つの保育園に寄付させていただきました。その翌年保育園を訪問させていただいた際に先生方が私に礼を言われたのです。私がしたことなんて氷山の一角にも満たない。まったく非力なものなのに、こんな小さな寄付活動に対して彼女たちは頭を下げてくれたのです。たまたまその日は私の誕生日で、子どもたちは日本語でハッピー・バースデーを歌ってくれましたが、嬉しさと悲しさが入り混じった、感極まらない一時でした」

「その時にお話を聞いたのですが、保育園の先生方は、津波警報からわずか30分という短い時間内に、昼寝していた園児70名近くを全員無事に高台に避難させたのです。3月11日、自らの命をかけて園児たちを救った勇気ある行動をとった先生方こそが本当のヒーローなのであり、私ではありません。今日いただいたゴールド・ホイッスル賞を、あの先生方とも共有したい。彼女たちは私よりはるかに尊い功績を残しているのですから」

レモニア氏のこういった謙虚な一面を見れば見るほど、彼の中に根付く「和の心」の存在をしっかりと感じとれるのである。

■レモニア氏のクルー・チーフ哲学

レモニア氏は今回のスピーチの結びに、「50年前に父親がくれたアドバイスは、自分を助けてくれる仲間を大事にし、でした。そのアドバイスに忠実に従った結果が今この会場に集まってくれている皆さんだと思っています。今回私が代表していただいたゴールド・ホイッスル賞は、皆さん一人ひとりのものです」と語っている。

レモニア氏の気遣いは、彼のクルー・チーフとしての哲学の表れでもある。

「クルー・チーフ」という言葉を聞いたことがあるだろうか。フットボールにおけるレフリーは、主にQBやバックフィールドにおけるアクションをカバーするだけでなく、クルー全体のリーダー役で、そのまとめ役としての役割をクルー・チーフという。

クルー・チーフとしてのレモニア氏は、「クルー内の審判員全員が最大限力を出し切れるための雰囲気づくり」に細心の注意を払っているように見える。最終責任はレフリーが負うが、試合を円滑に運営するためにはフィールド上の7名の審判員や、無数のアシストクルーの協力が不可欠だ。リーダーに頼るのではなくクルー全員が協力して良い試合を創っていく雰囲気をレモニア氏は最も大切にしている。

話は今年4月にさかのぼる。審判研修のために来日したレモニア、ベケットの両氏は、滞在期間中に日本のクルーとともに笛を吹いたが、その際にレモニア氏の審判哲学を目の当たりにする機会があった。明治大学と日本体育大学の試合前に行われるクルーの打ち合わせで、クルー・チーフであるレモニア氏はこう強調した。

「私（レモニア氏）やビリー（ベケット氏）がいるからといって、絶対に遠慮しないでほしい。もし我々のジャッジが間違っていると思ったら正直に伝えてもらいたい。グラウンド上で話し合って軌道修正をかけよう。試合後に映像をみて後悔したって遅すぎるんだ。だから僕はみんなの意見をきちんと聴く。試合はフィールドに立つ22人のものだ。審判のものではない。選手達のために正しいコールを追求しようではないか」

審判クルーは選手が十二分力を発揮できる為に存在し、クルー・チーフは審判員がその力を選手の為に発揮できるよう存在する、というレモニア哲学を聞いた瞬間だった。



ゴールド・ホイッスル賞トロフィーの横には、日本からプレゼントされたワールドカップ2007川崎大会の審判写真集。レモニア氏と日本のフットボール審判との交流はここから始まった。

そして実際にその試合で、レモニア氏があたかも予測していたかのようなプレーが発生した。パス成功・不成功の微妙なプレーを背後から見ていた審判員と、前方から見ていた審判員が一旦試合を止めて協議したのだ。背後から見ていたベケット氏には、パスは成功したかに見えたが、前方から見ていたLJの大沢英勝氏はボールがトラップされていたのを見ており、結果としてパス不成功の判定に導いたシーンがあった。後日レモニア氏はこのプレーについて、「あの正しいコールはクルー全体を救ってくれた。勇気を持って手を挙げてくれる審判と、私はいつでも仕事をしたい」と振り返っていた。

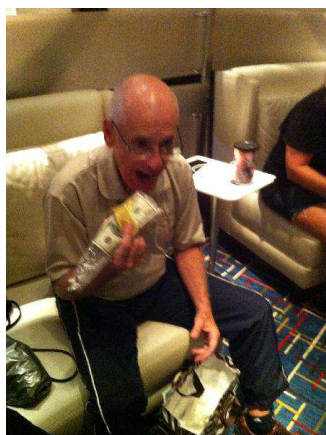
■もう一つの「授賞式」

「ところで、日本といえば、」と壇上で話すレモニア氏が時折見せるいたずらっ子のような目線の先に、そのベケット氏がいた。

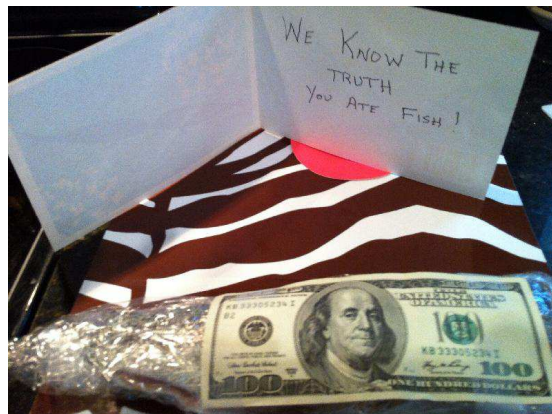
「親友でこの授賞式に参加してくれているベケットは、6年前の川崎大会で日本に滞在する2週間に、私が魚を食べるか食べないかチャレンジしてきました。魚嫌いの私は食べないほうに、そしてベケットは食べる方に100ドル賭けたのです。果たして私は2週間、魚を食べる



左からレモニア氏とクルーを組んだことのあるビッグテンアンパイヤのリック・ネルソン氏、ACC フィールドジャッジのビリー・ベケット氏、関東審判部の七久保氏。2007 川崎大会の思い出話に花が咲く（リック・ネルソン氏宅にて）



ベケット氏宅で開かれた夕食会にて、魚と一緒に包まれた\$100を受け取ったレモニア氏。この\$100はレモニア氏が訪問した保育園に寄付される



ベケット氏からレモニア氏へのメッセージカード。
「それでも魚を食べたと信じている」

ことなく日本で過ごしました。以来6年間、毎年日本に訪れていますが、いまだに魚を口にしていないと日本の審判も証言してくれています。それなのにベケットはこう言うのです。だしや調味料として魚を絶対に食べているはずだから、俺は負けを認めはしないと」

思わぬ場面で暴露話の対象となってしまったベケット氏だが、黙って引き下がるわけがない。

レモニア氏は2013年シーズンの開幕戦（8/31）にベケット氏の住んでいるアトランタ市で、昨年の全米覇者アラバマ大学対バージニア工科大学の伝統の一戦を担当することが決まっており、試合後にはベケット氏宅での夕食会が予定されている。そして、その場でベケット氏はレモニア氏の大嫌いな魚フライの中に100ドル札を丸めて差し出す進呈式を計画中だ、とグラント・ラビッツから帰る途中で大笑いしながら打ち明けてくれた。

こちらの「授賞式」も大盛況であったと、ベケット氏から後日報告があったことを付記しておく。



2012年に被災地で献花するレモニア氏。被災地の人々を想う心に国境はない

本報告は月刊 Touchdown 2013 年 10 月号に掲載された記事をもとに FOA News 用にアレンジさせていただきました。

※納会での寄附金52,944円の半分26,472円を
釜石保育園と鶴住居保育園にそれぞれお渡ししました。



オービック ドイツ遠征 帯同審判

田口 眞行

5月16日（木）から21日（火）までオービックシーガルのドイツ遠征に帯同審判として、馬島敦氏、平澤幸一郎氏と共に参加させていただきました。オービックのドイツ遠征は昨年に続き2回目になります。今年はデュッセルドルフで地元のデュッセルドルフ・パンサーとパウル・ヤネス・スタジアムで親善試合をおこないました。

今年の遠征で特筆すべきことはデュッセルドルフ日本人学校への表敬訪問があったことです。デュッセルドルフ日本人学校はドイツでも日本人が多く在住している都市であるため生徒数は小中学生で500名を超えています。また、治安が良いため諸外国のなかで保護者の送り迎えが必要ない唯一の日本人学校だそうです。実際放課後は日本で見える光景のようにランドセルを背負った小学生が友達と一緒に下校する風景を見ることができました。オービックの選手達は習志野市でも小学生への普及活動をしているため、子どもたちへの指導にとっても慣れていて、競技の紹介から実際にボールに触れてフラッグフットボールで遊ぶまで、飽きさせることなく2時間のプログラムを大変上手にこなしていました。この日フットボールに触れた小中学生のなかから将来の選手が誕生するのではと思うくらいオービックの選手達は試合前日にもかかわらず熱心に指導する姿に感銘しました。たいへんすばらしい企画で競技で強ければ良いという考えではなく、普及活動にも力を入れているチームの姿勢を感じとることができました。

今年の対戦相手のデュッセルドルフパンサーは1978年創部のヨーロッパで最も歴史あるチームであり、昨年オービックが対戦したドレスデンモナークスと同じGFL（ドイツリーグ）北ディビジョンに所属しています。リーグを6度も制した名門クラブチームで、1995年にはヨーロッパチャンピオンにも輝いている名門かつ強豪チームです。



日本人学校の全校生徒を前にフットボールの紹介

ドイツでは学校の部活動にあたるものがなく、運動だけでなく、文化的な活動も地域のクラブが中心になっているそうです。試合のチケットを買って試合を見ることがそのクラブを応援することになるので、招待券などなく、すべての人が有料で試合を見るそうです。リーグ戦での観客数は2000名ほどだそうです。それがすべて収入になり、スポンサーもいるため、クラブ組織が財政的にも成り立っているそうです。スポンサーはお金を出すのではなく、物品を提供する場合もあって、クラブ員がそのスポンサー企業を利用することで、良い循環システムができている様です。ちなみにパンサーのクラブ員は2ndチームやジュニアを含め500名いるそうです。



ホテルでのプリゲーム・ミーティング

さて、ドイツまでの移動ですが、成田発のルフトハンザ フランクフルト直行便で現地に向かいました。仕事の都合で一日遅れの到着組や一足早く試合が終わったらすぐ帰国する選手もいました。やはりクラブチームの大変さではないでしょうか。フランクフルトでは関西からの選手達も合流し、空港からバスでデュッセルドルフに向かいました。チーム関係者以外は私たち審判とタッチダウン誌の上村弘文氏がチームと行動を共にしました。到着してからドイツですが、天候が不順でとても寒く、長袖なしにはいられませんでした。例年であれば5月半ばは暖かい日々ですが、ドイツでも異常気象でした。

試合当日も午前中は雨が降っていましたが、午後には雨もあがり、夕方には暖かい気候となりゲーム日和となりました。会場に着いてから時計とプレークロックがないことがわかりましたが、主審と3人のドイツ審判員は、このような環境での試合には慣れているようで驚く様子もありませんでした。ドイツの人気スポーツは圧倒的にサッカーであり、マイナー競技の一つのようです。しかし、前記したようにクラブとして

経営が成り立っているところに私たち日本も学ぶことはあるのでは考えさせられました。

プリゲーム・ミーティングは、試合当日の昼から宿舎のホテルの会議室で開かれました。

三国の混成チームと云う特異性から、メカニックとルール確認を中心としたミーティングとなりました。レフリーのスミス氏は國崎さんがU19の世界大会で同室だった人物で、現在 IAFA (アイルランド連盟) のボードの一員であり、ルールにも精通し、大変紳士的な人物でした。



オフィシャルクルー 左から
LJ 平澤、BJ ホルツフォイト、U 田口、R スミス
HL ギャンドイ、FJ ヒューバーナー、SJ 馬島

ドイツでは、日本と同じCCAのメカニックをベースにしていた、それは少し意外なことで EFAF (ヨーロッパ連合) はBAFRA (イギリス審判協会) の影響で独自のメカを採用していると考えていたからです。アイルランドは英国にならいCCAではないメカでした。最終的には、CCAに近い混成メカニックに落ち着きました。

メカの統一も今後必要となってくるでしょう。

試合会場でのミーティングは、フィールドの状況に合わせたメカニックとチーム情報の確認がメインでした。試合は終始オービックがリード、体格差はありましたが、技術面・フットボールの理解度共に力の差はあり、試合結果は34-3でした。ドイツチームの一員に立命館大学やアサヒ飲料で活躍した佃宗一郎選手がプレーをしていました。体格差をものともせず、相変わらず切れの良い走りをしていました。NFL への挑戦をするためにドイツのチームに加入しているそうです。驚きました。

ほんの数日間の短い期間でしたが、日本のトップクラスのチームに同行できたことは非常に良い経験であり、ドイツ・アイルランドの審判との交流も大変有意義なものでした。このような素晴らしいチャンスを与えていただき関係各位に心から感謝いたします。来年度もドイツ遠征は予定されているようです、来年はこの記事を読んでいるあなたが派遣されるかもしれません。海外での経験をまた国内での試合に生かして、日本のフットボールが益々発展するよう恩返しをしていきたいと思っています。皆様いろいろありがとうございました。



佃選手



AMERICAN FOOTBALL
IFAF WORLD CHAMPIONSHIP
STOCKHOLM

2015年の世界選手権はストックホルム
(スウェーデン) で開催